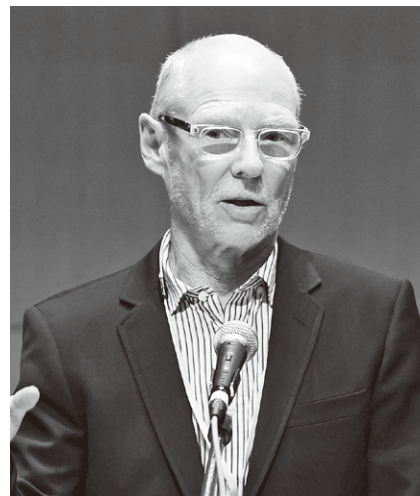


基調講演

唯物論的時間

コロンビア大学バーナードカレッジ教授 キース・モクシー



コロンビア大学バーナードカレッジ教授。バーバラ・ノヴァク教授。視覚研究を関心領域とした美術史を専門とする。主要なイメージ研究の理論と実践に関する議論に寄与している。主著は『視覚的時間—歴史におけるイメージ』（2013）、「説得の実践—美術史における政治とパラドックス」（2001）など。「美術史」（イギリス）、「美術史誌」（スウェーデン）等の定期刊行物の編集委員も務める。

講演の主旨は、アート作品やモノUMENT、そして自然物などの「物質」と観客や読者、そして作者などの「人間」が出来る瞬間、その「出来事」に沿って立ち現れる「唯物論的時間」の「諸形式」を考えることにあった。

複数の時間が同時に流れてしまうような経験、そしてそれによって可能となる主体と物質との相互干渉的な関係性に関

心を注いでいる。この出会いの時間、あるいは出会いの中に流れる時間を「唯物論的時間」と呼ぶ。それは異種混交な時間であり、複数の時間の混成物、コラーージュかもしれない。この時間が私（主体）と物（客体）との関係をどう構成するか、そしてそこに物や私のエージェンシーがどう作り出されるのか、問題なのである。

提示された五つの例は、啓蒙時代には主体と客体が分割されつつそのギャップが自明となつてしまつたが、それを再び近づけてくれるような物質（として）の時間を経験させ、知（エピステモロジー）と存在（オントロジー）が、図らずも勝手に相互干渉しあつてしまうハイブリッドでシンビオティックな時間性の諸様態をさらけ出す。

鑑賞者は、絵画やインスタレーションを見る際、この別種の「時間性」を経験することになり、それによって物質としての自分を経験したり、見ている物質の表面に流れる複数の時間を経験することができる。この時間への注視は、人間の物質化（奴隷の正当化）とそれを支える視覚文化の様態を暴き、主

体／客体や動物／非動物の境界を越えて、唯物的存在である我々自身を変容するのである。

すなわち、我々が物質を見るのではなく、物質が我々に唯物論的な眼を与えてくれる。そして、物質は我々の時間を挑発する事を認識せよと述べている。その際に、時間こそが我々の真の他者なのだ。その出会いの契機は物質の中にある。

この出会いの具体例を様態として五つあげている。まず、第一に物質的対象の時間。化石などの自然の物質が喚起する、物質を通り過ぎる時間とそれを鑑賞し評価する鑑賞者の時間。第二にイメージの時間。マヤの石碑にある、テキストとイメージによって描き込まれた二重・三重の時間を、イコノグラフィーの論理でテキスト分析する鑑賞者が捕える時間と、それを覆すタイムストーンという物質に刻み込まれた時間。第三に、アーティストの時間。アルトドルファアの描線の物質性は鑑賞者の解釈のペースを遅らせ、そしてレンブラントの複数回の印刷と具体的印刷技法の調節によって生じる効果はいずれも、読もうとする鑑賞者にとってはそれぞれの物質的側面がサインとして働く。アーティストが自分の時間を作品中に書き込み、それが鑑賞者の解釈と時間に介入する例であるが、同時に見る者の選択的視覚を問題化させる。複数のレイヤーがあるのに、ある一つの意味を選択してしまうこと。それは見る者による物質的時間への積極的介入があることを証言

し、その選択的思考と介入の様態を暴くのである。読者による選択的読み取りで何が読み取られるかがレンブラントのエージェンシーを構成する。

そして現代、フィンチの例は、モダニズムの目的性へのポストモダンの挑戦である。モダニズムは作品の表面において抽象性を平面化する作業であり、形式と内容を等価にし、更に均一化するが、フィンチの作品はその人工的制作者性を隠さない。この物の前景化によって可能となる表象不可能な経験は、再現された雲が実際に訪問当日に存在した雲と一致しないことを鑑賞者に気づかせる。もし仮に再現された雲が本物と同じものと認識されるのであれば、それは鑑賞者自身の関与によって想定できる当日の状況が付加され、想像された雲に過ぎないことを、人工的で日常的な物である洗濯バサミは気づかせるのである。だからこそ、作品の人工性・物質性（ここでは、ありふれた洗濯バサミ等）は隠されず、むしろそれに気付くように作品が配置・制作されている。ポストモダンの例であるが、その本質は唯物論的時間への気付きを促すことにある。

対象とそれを鑑賞する主体との関係が、複数の唯物論的時間によって媒介されるなかでの、アーティストや鑑賞者のエージェンシーの問題として捉え直すことになる。我々鑑賞者が対象と時空を越えて取り結び得る関係を再体験、そして

脱構築することが可能となる。

脱構築の結果、対象の時間の「他者性」が、「我々自身の時間のなかでの弱く不確かな位置」を暴くのだが、そのような我々自身の不確かな位置は、啓蒙と植民地主義、そして視覚文化との関わりについての最後の議論で、より先鋭に論じられる。

啓蒙主義の時代の視覚の様態とミメーシスの制度が奴隷をたんなる物質と見ることを可能とさせる条件となった。啓蒙主義の時代の視覚の様態とミメーシスの制度が奴隷をたんなるモノとして見ることを可能とさせる条件となったことをモクシーは指摘する。西洋の言葉が通じず、信じる宗教もなく、進んだ文明が産み出した機器を持たない野蛮な生活を過ごす植民地の原住民は人間ではない単なるモノと化す。原住民は西洋の基準を当てはめる限りで主体としての人間とは言えず、基準から漏れた彼らは人間として扱う必要のない単なるモノとして見るのが正当化されている。この考えを敷衍すると、特定の視覚文化によって植民地主義が可能となったこと、すなわち植民地主義は啓蒙主義的視覚文化の構造的帰結なのである。

この人間と物質の同一化と均一化、そして透明化をこそ問題化しなければならない。それには「唯物論的時間」を理論化することが必要である。しかし、それは決して人間と物質あるいは主体と客体を差異化することではなく、物質が可能とさ

せる固有の相互干渉のあり方を見る必要があるのだ。

この唯物論的転回においては、ポストモダンでは物質が語るといえるのではなく、物質はつねに語るものであり独自の時間を持つものであるが、その物質の語りを透明にしてしまう視覚的制度があったこと。ポストモダンの作品はその隠蔽の歴史を暴き、物質の時間を改めて経験させてくれるであろう。

